
私の仮恋人は親友のお兄さん

ひなた翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の仮恋人は親友のお兄さん

【Nコード】

N4033Q

【作者名】

ひなた翠

【あらすじ】

毎月、クラスメートからパーティに誘われる花音
今日に限って、親友の果恋ちゃんが大激怒！

いもしない格好良い彼氏がいる宣言を、果恋ちゃんにされちゃって…
一週間で、花音はクラスメートの麗華が格好良いと言うような彼氏
を見つけないとはいけなくて…

彼氏いない歴15年

「…だったらそのダンスパーティーに花音かのんの彼氏を連れてくればいいのね？」

「ふふふ、できるの？　こんな地味で、なぐんの取り柄もない子に、彼氏なんて笑っちゃう」

「花音にはすごいイケメンで、格好良い彼氏がいるのよ！　覚悟してなさい」

そう言って親友の果恋ちゃんが、クラスを仕切る麗華さんに啖呵をきった…

私に彼氏がいるはずもなく…

どうしよう…果恋ちゃん、駄目だよ！

私に格好彼氏なんていないんだよ

麗華さんに知られたら、苛められちゃうよ

彼氏いない歴15年

「果恋ちゃん、無理だよ！ 今からでも謝りにいこう？ 麗華さんのパーティーには、行けないよ」

私は教室の隅で果恋ちゃんの腕を掴んだ

教室の中央では伊集院 麗華が私たちを見て笑っていた

私の名は木下 花音

15歳の高校一年生だ

平々凡々の暮らしをしてる

そんな私が有名私立の女子校に入学してしまった

こんなお金持ちばかりがいる学校なんて聞いてないよ！

中学の先生も両親も両手をあげて喜んだけど、私の高校生活はつまらない

麗華さんからの視線を気にしてできるだけ、目立たないように、静かに過ごそうと努力した

そんな私に、麗華さんが自宅でやる月一回のダンスパーティーに私を誘ってきた

誘う男性がいない私を知っていて、麗華さんは声をかけてくる

一般人とセレブの差を見せつけたいだけ

一般人の私より、麗華さんのほうがセレブで良い人種であると、まわりに知らしめる儀式みたいなものだ

私はもう慣れたし、気にしないように振る舞える

でも果恋ちゃんは違った

毎度のように私を見下す麗華さんに、とうとう怒りをあらわにしたのだった

『一週間で見つければいいのよ』

前向きな発言だけど

一週間で、麗華さんを唸らせるようなイケメン男子を彼氏にできると思う？

携帯のメモリーには女子の名前ばかりで

男と言えば、お父さんくらいだよ？

彼氏いない歴15年

何のツテもない私が、見つけられるわけないよ

ダンスパーティーで恥をかかせられる前に、麗華さんに謝ってしまう
ほうがずっと気が楽だよ

「一週間もあるんだから平気だよ」

果恋ちゃんは笑顔で言う

「むりだって私、できないよ。今まで付き合った経験だってないし」

「んー、なら私に任せてよ。放課後、一緒に帰ろう。とっても良い
案が浮かんだわ」

そう言って、果恋ちゃんは自分の教室に戻っていった…

良い案って何？

私に彼氏なんかできないよ…

麗華さんの笑いにされるだけ…

放課後

私は果恋ちゃんの家に行くことになった

『家で私の計画を教えてあげる』

なんてにこにこ笑顔で言ってくれたけど

その計画、本当にうまくいくのかな？

だって私が彼氏にしたいって思っても、男性側がそう思わなかったら

恋人同士にはなれなわけだし

それに一週間で恋人同士になれるの？って疑問もあるの

好きになるまでに時間がかかるだろうし

互いに話をして、相手のことを知って、それで『好き』って感情が
生まれるわけでしょ？

もっと相手に優しくしたいとか、触れてもらいたいと

そういう感情って、相手のことを知った上ででてくるものだと思うし

それって1週間でどうにかなる問題じゃないよ

きっと彼氏のふりをして、麗華さんのパーティに参加して終わり…

って関係になりそう

つまり都合の良い男って感じで私のプライドを守るために利用して、
終わる関係なんて相手に申し訳なくて、私にはできないよ

彼氏いない歴15年

「ここ、ウチのマンション」

大きなタワーマンションを私は見上げた

私と仲良くしてくれる果恋ちゃんだけど、お金持ちの娘さんだった
…ね

都心部にある大きなマンション

きつと部屋を借りるだけでも高いんだろうな

私は果恋ちゃんの後ろを歩いた

大きなエントランスが、まるでホテルのようだ

足音が響いた

エレベータに乗ると、果恋ちゃんは最上階を押した

「すごいね！ 最上階に住んでるの？」

「ううん。私の部屋はもうちょい下。これから行くのはお兄ちゃんの部屋だよ」

「え？」

「ウチはみんな、個々に住んでるんだ。父親は自分の経営している

ホテルで暮らして、母親は海外を転々としてて、んでお兄ちゃんと私がこのマンション」

「はあ…」

私は世界の違いに圧倒された

私の家は小さなマンションの一室を借りて生活している

妹と同じ部屋を共同で使い、両親は居間で寝ている

古いマンションで上の階や両隣の生活音なんか、普通に聞こえちゃうような壁の薄い古いマンションだ

私って高校選ぴを間違えたよね？

明らかに世界が違う過ぎる

マンションの最上階につくと、目の前には家のドアがあった

最上階は一室しかない

ここに果恋ちゃんのお兄さんが生活しているんだ…

果恋ちゃんは持っていた鍵で部屋を開けると、ずかずかと中に入っていた

「お兄ちゃん、可愛い妹が来たけど」

果恋ちゃんは靴を脱いで、部屋の奥に行ってしまう

私は、どうしたらいいのかわからず、玄関のドアを開けたまま呆然と広い廊下を見つめていた

「俺が忙しい時間に、来るなって言ってるだろう？」

そう言って果恋ちゃんのお兄さんらしき人が部屋から出てきた

「ひい！」

お兄さんらしき人と目が合った私は驚いて声をあげて、玄関のドアを閉めてしまった

彼氏いない歴15年

だって裸だったから

パンツは……履いてたと思うけど

たぶん

下までは見てないから……でも上半身は何も着てなくて

父親だって、そういうのを気にして、必ず服は着てたから

裸なんて見たことなくて

私は驚いてしまった

一人、エレベータとドアの間に立つ私

ドアが閉まってしまうと、生活音なんか、全く聞こえなくて

果恋ちゃんとお兄さんが、何を話しているのか……わからなかった

私が勝手にドアを閉めてから、5分もなかったと思う

家にこのまま帰ったほうがいいのか

それとも果恋ちゃんが出てくるのを、待っているべきか、悶々と悩

んでいると

濃いグレーのワイシャツに、黒いスーツのズボンを履いた男の人がドアを開けてくれた

さっきまで裸だった果恋ちゃんのお兄さんらしき人だ

「妹の友人だってね。中へどうぞ」

にっこり笑う顔は格好いい

でも上半身裸の姿が、脳裏から消えず

私は顔に熱をもったまま、頭を何度も下げて、玄関へと足を踏み入れた

「居間に妹がいるから、ソファに座っててくれる？」

柔らかい口調にまろやかな声が、似合う人だ

声のトーンも少し低めで男らしい

「お兄ちゃん、早く紅茶、淹れなさいよ」

「うるせえな。自分でいれろつつうの。俺はこれから仕事だって知ってるだろうが」

私の前を歩いていたお兄さんの雰囲気が一気に変わる

強めの口調で話すお兄さんはちょっと怖い

「だから可愛い妹のために、休めってメールしておいたでしょう？」

「メール？　んなの知らねえよ」

「そうやって可愛い妹のメールを無視するんだから。あゝあ、ヤダやだ。これだから仕事マンは嫌いなものよ」

「あんな…本当に知らねえんだよ」

「じゃ、今すぐ休みの電話をいれなさい。お兄ちゃんくらいにないたって、仕事なんてどうにかなるから」

彼氏いない歴15年

お兄さんはキッチンに入り、ポットからお湯を出す

Tパックを紅茶カップに入れて、三人分の紅茶を淹れてくれた

「果恋ちゃん…私、帰るよ。お仕事の邪魔しちゃ悪いし」

私は果恋ちゃんの後ろに立つと耳元で囁いた

「気にしないでいいんだって、花音のほうが一大事なんだから」

「でも…私は麗華さんに謝ればすむことだし」

「それはダメ。絶対に駄目よ。あんなに馬鹿にされて悔しくないの？
必ず見返してやるのよ」

「でも…」

「あの顔なら、麗華だって悔しがるでしょ？」

果恋ちゃんは、キッチンで紅茶を淹れているお兄さんを指でさした

ええ？

「顔だけなら良い顔してるから。付け焼刃には持ってこいよ」

それは…ちょっと、悪いでしょう

いくら果恋ちゃんのお兄さんでも、良くないよ

「あの…でも」

「いいの、いいの」

果恋ちゃんは、ソファを叩いて、私に座るように目で訴えた

「お兄ちゃん…紅茶、遅いけど？　あと早く、仕事を休むって電話しなさいよ」

果恋ちゃんは厳しい声で、お兄さんに文句を言う

「我が儘だなく。これだから、年下は嫌なんだ」

え？　私は肩身が狭くなった

果恋ちゃんのお兄さんは、ブツブツと文句を言いながら、電話の前に行く

家電から会社に電話したようだ

妹の具合が悪くなったから、休むと言っていた

果恋ちゃんって凄い

本当に、休ませてしまった

スーツも着て、仕事に行く気だっただろうに

私はますます、申し訳なくなつて肩を縮めて座つた

「ほら、紅茶だよ」

果恋の前に荒々しくコップを置く

でもお兄さんは、私に置くときだけ丁寧に置いてくれた

「何、この扱い差は？ 可愛い妹にたいして冷たくない？」

「どこが可愛い妹だよ。……ったく。お前のせいで、月に何回欠勤になつてゐるんだか」

「ごめんなさいっ！」

私は謝ると、お兄さんは驚いた顔をして、首を振つた

「君が謝ることじゃないよ」

「そうよ。だいたいお兄ちゃんはサボり癖があるんだから」

「お前のせいだろうが！ 塾の送り迎えをしろ、とか。服が買ったいから、車を出せとか。お前の願いごとは、ロクなもんじゃねえ」

ロクなもんじゃない……ってことは今回も、そう思われちゃうのかな？

面倒くせえって、嫌な顔をされるのだろうか

そうだよ。私の恋人役なんて、面倒くさいよ

やっぱりここは、麗華さんに謝るべきなんだ

仮恋人の契約

「果恋ちゃん、やっぱり良くないよ」

「いいの！ そうだ。紹介が遅れてたね。これが私のお兄ちゃんの
海堂 廉人^{れんと}」

廉人さんって言うんだ

顔も格好良いけれど、名前も格好良いね

私は頭を下げた

「私の親友・木下 花音よ。お兄ちゃんは、伊集院 麗華を知ってるっけ？」

「業界じゃ有名な娘だろうが！ だいたいお前の学校の女は、みんなあんな奴ばっかだろ？ …でも君は見たことないや。お父さんは何の仕事？」

「…あ、いや。その…普通の会社員です。…すみません」

「あゝ、もう！ お兄ちゃんは人を傷つけるのが、本当に得意よね！」

「ごめんね。ちょっと配慮が足りなかった。…ってお前がちゃんと、言えればいいことだろうが！」

なんかお金持ちの兄妹に見えない

普通の兄妹喧嘩に見える

…こういうのは、お金持ちも一般人も関係ないのかな？

「んで、麗華がどうしたって」

「月に一回、彼女主催のダンスパーティーがあるんだけど、それに参加して欲しいの」

「別にいいけど…で、それを言うために、俺の仕事を休ませたのか？ 悪いけど俺、仕事行くから」

廉人さんが、ソファから立ち上がろうとする

「ちょ…まだ先があるんだってば、そこに座って！」

果恋ちゃんは、廉人さんに座るように指をさした

しぶしぶ廉人さんは文句を呟きながらも座った

「ただ参加するだけじゃないの。ここにいて私の可愛い友人、花音を恋人にしていくなよ！ わかった？」

廉人さんの眉に皺が寄った

「は？」

「だから、今日からお兄ちゃんと花音は恋人同士ってこと。拒否権はないのよ。質問は私ではなく、花音によろしく。では、あとはお

若い二人の時間ってことで！」

果恋ちゃんは紅茶も飲まずに、廉人さんの家を出て行った

ちょ…ちよつと待ってよ

廉人さんの質問もちゃんと答えて言って…

私から説明なんて…できるわけじゃない

私は下を向いたまま、体が固まってしまった

緊張と、申し訳なさど恥ずかしさで、廉人さんの顔を見ることも、部屋の様子を見ることも、紅茶を飲むことさえもできなかった

廉人さんが、立ち上がる

私の体は驚きで、びくつと跳ね上がった

立ち上がった廉人さんは、私の隣に座ると私の肩を抱いた

「あ…いえ。あの…」

私は廉人さんの腕を振り払って、距離を開けて座りなおした

「やっぱり、よくないですよね！ 急にそんなことを言われても、困るっていうか。迷惑ですよね…」

仮恋人の契約

「まあ…ね。迷惑だよな」

廉人さんが答える

やっぱり迷惑なんだ

「ごめんなさい。この話は無かったことにしてください」

私は頭を下げると、廊下を走って玄関まで行く

靴を履こうとすると……

え？

靴がない…どうして

私の革靴がない！

後ろからゆつくりと、廉人さんが歩いてきた

「どうした？」

「靴がないんですけど？」

「どうせ、花恋が持ってたんだろ？ 拒否権はねえ…とか言ってたから。とりあえず、恋人同士でやることをやっちゃいますかね」

廉人さんが私の肩を抱いた

え？

恋人同士でやること？

やっちゃう？

「あの…」

私は廉人さんに、連れられるまま、寝室に入る

「これは良くないですよ」

私の体は硬直する

「でも俺ら、恋人同士なんですよ？ 質問は全て、君に聞くように
言われているし、まずは体に聞かないと」

「お話すれば…どうでしょう？」

「まずは体だよ」

私はベッドの上に押し倒された

怖い！

恋人同士って言っても、愛し合っているわけじゃないんだし

一週間後のパーティだけでいいんですけど

「君ってさ。もしかして処女？」

なんでそんな質問なの？

「はい」

「あっそ。俺は処女に興味ないから…ていうかさ。面倒だから。痛いとか、血が出るとか。そんなのに快感があるとは思えないし」

なんか急に冷たい気がする

果恋ちゃんが家を出ていってから、すごく冷たくなった

「ごめんなさい」

「で？　　どういう経緯で果恋が、俺に恋人になれっていう答えを出したのか、教えてもらえない？」

仮恋人の契約

「あの…」

「オドオドしない！ はっきり言いたいことは言う！」

ベッドの上に座っている廉人さんが声を荒げた

「麗華さんが、恋人を連れてパーティに来て言うから」

「言うから？」

「私には恋人はいないし、麗華さんのパーティに行けるようなドレスもないし…。だから行けないって毎回、断ってて。でも今回、誘われた時に、果恋ちゃんが傍にいて。麗華さんの言い方に頭にきたって。一週間後のパーティに彼氏を連れていくからって」

「ふうん」

廉人さんは興味なさそうに返事をする、煙草を吸い始めた

「その彼氏役に、俺を抜擢したわけね」

私は頷いた

「他にいないわけ？ 友人とか中学の同級生とか？」

「いません」

「携帯で手当たり次第、電話してみろよ」

「お父さんしか、男の人のアドレスってないから」

「あっそ。つまんねえ女」

ぼそっと廉人さんが、呟いた

確かにつまらない女だけど

「すみません」

私は涙が溢れた

面と向かって、男の人に言われると心が痛い

好きでつまらない女になったわけじゃないし

好きで、麗華さんに睨まれているわけじゃない

でもどうしたらいいかわからないから

「一週間だけで、いいんだな？」

「いいんですか？」

「俺が質問してるんだけど？」

「あ：はい。お願いします」

「なら、まずは…そのうざったい髪をどうにかして。それから…エステカ。それとも服か？」

「あの！ 私、そんなにお金ないですから。ただ一週間後のパーティーに、付き合っていただければ」

「俺の面子っていうのもあるわけ。だから一週間で、俺がどうにかしてやる」

「いや…でも、お金が」

「金？ 心配するな。女から金を取るような。みみっちい男じゃないから」

「でも」

「そのさく。『でも』とか、『あの』とか…やめようよ。良い女はそんな言葉を言わないんだ」

良い女講座

『一週間で、俺の隣に立っていても、おかしくない女にしてやる』

そう廉人さんに言われて、やっと果恋ちゃんから靴を返してもらった

それから私は廉人さんに美容院に連れて行かれた

見た目から高そうな美容院で、美容師さんはみんな廉人さんと、知り合いのようだった

私が髪をいじられている間、手の空いている美容師さんたちと、廉人さんは話をしていた

…というより、いちゃいちゃしていた

両隣に座っている女性たちは、廉人さんの体に触れ、廉人さんも女性の体を触っていた

廉人さんにとって、女性に触れるというのは自然な行為みたい

綺麗にネイルされた指が、廉人さんの身体を這っていた

切り終わった後、私は鏡を見つめた

長さがかわったわけじゃないけど、なんか雰囲気が変わった

何でだろう？

髪にも艶がある

カット以外にトリートメントをしたような…

それだけなのに、金額は2万を超えていた

え？ 2万？

私がいく美容室は、カットだけで3千円だよ？

なんでこんなに高いの？

廉人さんはさほど驚くこともなく、財布から万札を3枚出す

オツリはいらないからと言うと、美容室を出た

セレブな世界って、なんかちょっと違和感を感じるな

お金に執着心がないのかな？

他人のために2万をポンと投げだせるなんて、私にはできない行為だよ

「けっこう時間がかかったな。あとは明日だな。車に乗れ。家まで送る」

明日…

明日は何をするのだろう

またポンと大金を私のために投げだしてしまうのだろうか？

「あ…と。私、電車で帰れますから」

私は深々とお辞儀をすると、廉人さんに背を向けた

これ以上は迷惑をかけられないから、美容院代だけで、私の心はちくちくと棘が刺さって痛いよ

誰かに自分のお金を払ってもらうなんて、今までしてもらったことがないから

どうしていいか、わからないの

迷惑なんじゃないか？

もしかしたら、苛々しているんじゃないか

俺の金を使いやがって…思われてるんじゃないかって

不安でたまらなくなる

「良い女は家の近所まで、男を送らせるものだ。逆に家まで送らない男は、良い男ではないってこと」

駅に向かって歩き出そうとする私に、腕を掴んで引きとめた廉人さんが説明した

『良い女』のあり方

『良い男』のあり方

私には難しいかな……

良い女講座

「たとえば電車でデートしたとしても、同じ原理だ。男が女の家まで送る。それが付き合う上での鉄則。だから俺はあんたを、家まで送る。いいな！」

「はい」

私は廉人さんに言われるまま、車に乗り、家の近所まで送ってもらった

「あんたの家は？」

「えっと…じゃなくて、近所です」

「親に挨拶するから」

「え？」

どうしてそんなことまで？

「一週間とは言え。付き合うんだ。挨拶はする」

「大丈夫です！」

「私は首を横に振った」

「俺はこれから一週間。あんたを振り回すんだ。今日、早めに帰したのも、これからのことをあんたの親に話をして、了解を得てもら

うため。明日からは帰りがもっと遅くなる。そのための挨拶だ」

すっかり廉人さんペースになっている気がする

廉人さんはしっかりしている人だね

だって妹に勝手に押し付けられたのに、きちんと親にまで挨拶してくれるなんて、さらっとできることじゃないと思う

『良い男』だから？

廉人さんは『良い男』をマスターしているから、そういうことが出来るちゃうの？

私は廉人さんに家を案内した

冷たい印象はがらっと変わって、優しい紳士となった廉人さんはお母さんに挨拶をした

交際しているから、デートで帰りが遅くなりますが必ず家まで送ります…と母親に約束をして、廉人さんは帰って行った

「花音、どこで、あんな格好良い男と知り合ったの？」

母親は鼻を膨らませて、興奮していた

私は一週間後のパーティの話をした

だから仮彼氏であり、1週間後には別れる関係であるとも話をした

そう1週間だけの私の『彼氏』

「花音！起きて、起きなさい。廉人さんがお迎えに来てるわよ」

私のベッドに飛び込んでくると母親が、布団を勢いよく叩いた

え？ 今、何時？

枕元にある携帯を手にとると時間を確認した

まだ朝の5時だよ…私の起床時間は6時なのに

「失礼します」

低い声が聞こえてくる

「花音、おはよう」

私の目は見開く

勢いよく起き上がると、廉人さんの額と私の頭がぶつかった

「いったあい」

私は頭を押さえると再び、布団の中に潜った

「どうしてここに？」

「朝から来ちゃいけないの？ 俺ら、恋人同士でしょ？」

「え？」

だって恋人同士のふりをするだけで、放課後に会って、美容院とかエステとかして、一週間後に備えるだけじゃないの？

良い女講座

「お姉ちゃん、五月蠅い」

妹の紫音が冷たい言葉を吐きだした

寝ぼけているのか、寝言なのか

廉人さんには気づいていないようだ

「これからパーティまで、花音さんを預かってもらっても良いですか？」

「はい？」

私は飛び起きる

今度は廉人さんが、ぶつからないように、廉人さんが体を避けてくれた

「いいんですか？」

母親の目が輝く

え？ 反対してくれないの？

私はこれから6日間、廉人さんのマンションにお泊りすることになった

服は廉人さんが用意するからと、私はパジャマのまま、車に乗り込み

廉人さんのマンションへと連れて行かれた

嘘…だって…え？

私、廉人さんと同棲するってこと？

「昨日、あれから一晩、考えたんだけどな。ただあんたを綺麗にしたいだけじゃ…麗華を見返せないと思うんだ。綺麗になって俺の隣を歩いていても、麗華にすぐにバレる。恋人同士じゃなくて、間に合わなくて、果恋の兄貴に頼んだってな」

「だからって、一緒に暮らすって…」

「俺は夜の仕事をしている。放課後に会って仕事までの時間一緒にいるっていつでも、それなりに制限がある。日中は逆にあんたが、学校だろう？一緒にいる時間を増やすには、同じ空間にいるのがベストだ」

「あと6日間ですよ？」

「どうにかするんだよ」

「できますかね？」

「お前がやるんだ。頑張るのはあんただ」

廉人さんの口調は怖いけど、約束したことを、守ろうとしている姿勢にはすごいなって感心しているんだ

有言実行って言葉があるけど、なかなかできないじゃない？

たとえば押し付けられた仕事でも、しっかりとこなしていこうとする姿勢が、私は羨ましく感じたの

「夜の仕事って？　なんですか？」

「ホスト」

「え？」

なんかわかる気がする

廉人さんならきつと夜の世界で、ナンバー1になれるよ！

「だからホストだよ。店の経営者でもあるけど」

「す…凄いですね」

「別に。あり余る親父の金を貰って作った店だし。凄くも何でもねえよ」

「はあ…」

「その間抜けな返事は、今後一切するな」

「は…はい」

果恋ちゃんも、廉人さんもお金に執着せず、やるって決めたことは貫いて、尊敬しちゃうな

二人の傍にいとなんだか、麗華さんのことを、見返せそうな気がしてくる

私も頑張れそうな気がしてくるよ

良い女講座

教室に入った私に、麗華さんが目の前に立ちはだかった

「あら？　まずは見た目から頑張るの？」

「おはようございます」

私は挨拶をする

『何を言われても、下を向くな。笑顔で言葉を返せ。感情は表に出さず、言い返せば、上出来だ！』

廉人さんは私を学校まで、送ってくれた

その車中で、言われた言葉を思い出した

「髪を切って、見た目を明るくして。まずは彼氏候補を見つける計画もいいけど、パーティまでそんなに時間はないのよ。わかっていらっしやる？」

綺麗に化粧した麗華さんが、キラキラした目で話しかけてきた

カールした髪が揺れる

やっぱりお金持ちは違うよ

「そうですね。時間がないからこそ、できることだけでもしたいです」

笑顔は…ちょっと難しいな」

麗華さんの目を見て、言い返せたけど、笑顔で…という課題は難しかった

でも麗華さんには効果があったようで、悔しそうな顔をしてツンとそっぽを向いた

「やるじゃん！」

廊下で様子を見ていた果恋ちゃんが、教室に飛び込んできた

「ごめんね。お兄ちゃんから聞いたよ。酷いお兄ちゃんが悪かった！本当に顔しか、取り柄がなくて…」

「あ…でも、良くしてくれるから」

「いい、いい！ 私に気を使わないで。本当に無愛想で最低野郎なのは、知っているから」

「本当に良くしてくれるよ？」

「いきなり体を求めてくる男に、良い男はいない！」

「え？　そこまで聞いているの？」

「だいたいわかるよ。お兄ちゃんの行動なんて、ワンパターンだもん。女にはモテるけど、最初だけね。あとは『冷たい』だとか。『愛されてない』とか。そういう理由で振られるのが、落ち！　外っ

面がいい分さ。女のほうも、優しくされて勘違いしちゃうのよね。だから、花音も気をつけてね！ お兄ちゃんは、猛獣よ。好きにならないように、しておいたほうが、身のため。…でも、利用できるときは、思う存分、利用する価値あり。なんて言っちゃって、顔だけはいいいからね」

果恋ちゃんは、私の肩を叩いて、教室を出て行った

良い女って、果恋ちゃんみたいな人と言うのだろうか？

少し、果恋ちゃんを見習ってみようかな…

一週間だけでも、果恋ちゃんの性格を真似てみようっと

果恋の研究

私は授業中：ノートに書きだしてみた
果恋ちゃんの性格を

いつでも強気で、自分が負けるとは思っていない

それでいて、まわりの協力は遠慮なくもらい、必ずお礼をする

『利用できるときは思う存分、利用する』

これも果恋ちゃんの良いところ？

今は廉人さんの好意に甘えていいってこと？

明るくて、どんなときでも笑顔を絶やさない

おどおどしないし、はっきりと物事を発言して……

書きだせば書きだすほど、私の性格とは正反対だ

：なら、私は正反対の女を演じればいいってこと？

演じられる？

私にできる？

駄目よ、弱気はいけないんだ

疑問に思ってたなら、前に進めないよ

頑張るしかなくて、廉人さんも、果恋ちゃんも協力してくれてる

成功のカギは私がもっているんだ

私が演じなくて、失敗して二人に迷惑をかけてしまう

だから、私は演じなくてはいけないんだ

昼休み

私は果恋ちゃんと一緒にお弁当を食べた

果恋ちゃんは人気がある

麗華さんとは仲が悪いけど、他の人とは仲が良い

クラスを仕切りたい

もしかしたら学校を仕切りたいと思っている麗華さんには、目の上のたんこぶっていったところ

どうしてこんなに果恋ちゃんは人気があるのか

それは明るくて、はっきり物事を言って…それでいて悪意がない

冗談も言うけれど、相談にもものるし、的確な意見を言う

友人のために、時間をさいて…それが厭そうに見えない

私はすごいと思った

果恋の研究

「果恋ちゃん、凄いね」

「え？ 何が？」

「凄くしっかりしてる。羨ましいな」

「どこが？ あんな馬鹿兄貴で、家族で過ごす家もない。私がどれだけ花音の生活に、憧れているか！」

「そうやって、スパって相手を思いやる言葉がでるのが、凄い！ 尊敬しちゃう」

「何より。そんなに褒めたって、何のサービスもできませんよ」

私と果恋ちゃんは笑う

頑張ろう

きつと…ううん、私だって良い女になれるはず！

私は自分なりに出た良い女研究結果を、実践することにした

正門に、廉人さんの車が停まった

私を迎えに来てくれたのだ

私は助手席に乗り込むと、笑顔で廉人さんの顔を見た

「ありがとうございます」

元気よく、口にした

「あ？ ああ、まあな」

廉人さんが、驚いているようだ

ちょっと嬉しい

その驚いた顔を見て、わくわくした

昨日の廉人さんは、私の言葉に：行動に苛々していた

でももうそんなことはさせないんだ

ずっと驚かせっぱなしで、パーティを成功させるんだから

車に乗ると私は勝手にMDをいじった

「音楽が聞きたいから、いいでしょ？」

「あ：構わねえよ」

「でも私の好きなのがないから、やっぱり聞かない」

私は窓に目をやった

明らかに廉人さんは、驚いていた

目を丸くして時々、私の顔を見ていた

「何か、あったのか？」

「何もないよ。どうして？」

「いや…別に」

「そうですか。今日はどこに行くの？」

「エステに予約してある。それから俺の店に来るか？」

「いいの？ 嬉しいな。そういうお店って行って見たかったんだ」

こんな感じでいいのかな？

廉人さんが苛々してないってことは、これでいいのかな？

果恋の研究

「うっわ。すべすべになるんですね」

エステが終わると、自分の腕を触って、声をあげた

受付では、廉人さんがエステ嬢といちゃいちゃしながら、会計を済ませていた

「一週間のコースで、30万になります」

30万ですか？

金額に私はちよっと、動揺する

でも廉人さんは、とくに気にするわけでもなく、カードで支払っていた

「じゃ、今夜、連絡するから」

爽やかな顔をして、エステ嬢に手を振った

一度店の外に出ると、私は大きな声を出す

「なんだよ？」

「ちよっと忘れ物」

笑顔で廉人さんの肩を叩くと、私はエステの店へと戻った

受付にいる女性が、笑顔で出迎えてくれた

「質問なんですけど」

「はい？」と受付の女性が首を傾げた

「良い女の定義を教えてください」

「は？」

「あ…勉強中なんです。だから、知りたくて」

受付の女性は、勝ち誇った顔をした

たぶん、廉人さんに相手にされていない子とでも、目に映ったのか
もしれない

どんな風に思われようと、私の目標はパーティで、麗華さんを驚か
せることだ

今の恥は、一時のもの

我慢、がまん

「そうね。男にどれだけ貢いでもらえるかってことじゃない？」

「ありがとうございます」と、私は頭を下げると、エステ店を出て
行った

「忘れ物って何だ？」

店の前で待っていてくれた廉人さんが、不機嫌そうに口を開いた

昨日とは違う…苛々だ

どうしたのだろう？

「ちょっと、聞き忘れたことがあって」

「何を？」

「それは…言えません」

「何で？」

「女同士の秘密です」

私は廉人さんの前を歩いて、車に向かった

「制服で、廉人さんの店はまずいですよね？ あ…でも、マニアには喜ばれます？ お客さんは女性客だから、制服でも関係ないか」

私は車の中で、着ている制服に目を落とした

「服、買うか？」

「んー、どっちでも。店にいるのに、ご迷惑になるなら。服を買い
うかな」

「わかった」

廉人さんは、洋服を買いに、車を走らせてくれた

ブランド店を回り、3店目でやっと気に入ったデザインがあったと
言い、買ってもらった

本当はどんな服でも良いけど、少し振り回すのも良い女の鉄則?…
な気がしてきた

よくわからないけ…廉人さんの反応を見つつ、勉強をしている私です

果恋の研究

廉人さんのお店についたのは、夜も8時になってからだった

すでに店内に多くの女性で、埋め尽くされていた

「うわー、華やかな世界ですね」

私は廉人さんに案内されて、店の奥の席に通された

「ここで、良い女と良い男のやり取りを勉強するといい」

そう言って廉人さんは、店の奥へと入っていった

「ね！ 君の名前は？」

ホストが二人、私の両脇を固めて座ってきた

一気に緊張する

だめ！ 顔をあげて、笑顔を絶やさない

「花音です」

「へえー。可愛い名前だね。オーナーの知り合いみたいだから、俺らサービスしちゃうよ」

「でもお金の請求は、廉人さんでお願いしますね」

私はほほ笑んだ

「あ…じゃ、あんまサービスは、しないほうがいいのか？ サービスしても、オーナーの懐から出るんじゃない、利益はあまりなし？」

私は声を出して笑った

「おれは雅人」

茶色の髪に、紺色のスーツを着ている人が、自己紹介してくれる

「おれは俊だよ」

もう一人も名刺を渡してくれた

オレンジジュースが、私の前に置かれた

「え？ 酒じゃなくていいの？」

ボーイさんのような人に、雅人さんが声をかけた

「オーナーの指示ですから」

「あっそ」

「私、未成年ですから」

廉人さんはオーナーでもあり、ホストでもあった

店についてから2時間、休む暇もなくホールに出て、接客をしていた
私はそれを眺めながら、入れ替わり、立ち替わりくる

ホストの男性たちを、会話をした

緊張するし、無言で下を向きそうになる自分に、活を入れながら…
必死に、格好良い女を勉強し、演じた

果恋ちゃんの言うとおり、廉人さんは外っ面がいい

優しくて、女性の喜ぶしぐさや、言葉を知っている

そして絶妙のタイミングで、女性の嬉しがる言動をするのだ

それに喜ぶ女性の笑顔で、とても素敵で私は、恋をしている女性の
美しさに目を奪われていた

果恋の研究

「この店って、何時までですか？」

ちょうど接客を終えて戻ってきた雅人さんに質問した

「平日は終電前まで、金・土は朝の6時までだよ」

「日曜日は？」

「客の入り具合で決めてるんだ」

「そうなんですか」

私は時計を見た…すでに10時を過ぎている

こんな遅い時間まで、外にいたことがない

「私、帰るので、廉人さんに伝えておいてください」

「え？　まずいよ。オーナーに今、言ってくるから」

雅人さんが慌てて立ち上がったとした

「いいんです。仕事の邪魔をしたら、悪いですから」

「いやいやいや、言わないと。俺らが怒られます」

雅人さんは、私の制止もきかずに、廉人さんのところへ行ってしまった

女性客と楽しく話していた廉人さんは、一瞬だけ私に目をやった

雅人さんに何か話をする、小走りで雅人さんが戻ってきた

「送っていくから、もう少し待っててと」

仕事をしているのに、申し訳にないよ

私はただ、好意でここに居させてもらっているわけだし

そんな迷惑は：

私は鞆を持つと、勢いよく席を立った

「トイレ！」

隣に座っていた雅人さんの足を跨ぐと、走ってドアに向かった

「え？」

雅人さんの驚いた声がした

ボーイさんが、私の腕を掴もうとするが、一足先に私は身をかわして店の外に出た

早く走るのには、自信がある

中学が陸上部で、短距離の選手だったから、瞬発力には誰にも負けない自信がある

店の外は、夜10時だというのに、街は明るいし…人通りも多かった
全く人気がないと心配になるけど、私は安心して、人の流れに身を
任せて、駅へと向かった

素顔と演技

電車に乗り、最寄り駅で降りた

自宅までの道のりは、いつも自転車だけど…今日は廉人さんの車で移動してたから、駅からは歩いて帰った

本当なら、約束した通り、廉人さんのマンションに行くのだろうけど、鍵を持っているわけじゃないし、やっぱり寝る場所は家がいい
私は20分ほど歩いて、自宅のマンションに到着した

「おい」

肩を叩かれた

「はい…」

恐る恐る振り向くと、そこには怖い顔で煙草を吸っている廉人さんが、立っていた

「お早いお帰りで…」

私は苦笑いをする

「送るつつただろ」

「お仕事だったので」

「でも、俺は送ると言った」

「お客様を放っておかれるのは…」

「送ると言った!」

廉人さんの語尾が強くなった

「無事に家に帰ってこれましたし…」

「帰る家が違うだろ」

私は廉人さんに腕を掴まれて、車の中に入れられた

車の中は、煙草の臭いが充満していた

夕方乗ったときは、何の匂いもしなかったのに…

「あんた、何なんだよ!」

廉人さんが、苛々していた

「日中は、驚くほど、良い女だったのに…いきなり帰りやがって。意味、わかんねえ」

運転席に座った廉人さんが、愚痴をこぼした

そう簡単には、良い女を習得できないってことかな?

なんて心の中で呟いてみる

16年間、生きてきた土台があるわけだし

いきなり、性格を変えるには無理が生じる

日中は、頑張れても、夜は素に戻っちゃうのかも

「ごめんなさい」

「謝るのは聞き飽きた」

冷たく言い放つ

「廉人さんにとっての良い女って、なんですか？」

「弱い部分を見せない女だ。男のプライドを傷つけず、それでいて、甘え上手。それが良い女だ」

「わかりました」

そうなれるように努力します

心の中で、呟いた

素顔と演技

廉人さんのマンションに行った

でも部屋に入ったのは私だけで廉人さんは、またお店に戻って行った

広いマンションの部屋に一人

ここで生活をしていて、廉人さんは寂しくないのだろうか

いつも生活音に包まれて、妹喧嘩して…両親に学校の話をして、何かと音のある生活をしている

けれど廉人さんの家は静かだ

静かすぎるよ

隣の家がないし…最上階で、上の階の人はいない

生活音なんかなくて、静かだった

時より、冷蔵庫の音の機械音が、聞こえて

掛け時計の秒針が動く音が聞こえるだけ、すごく寂しい空間だった

ゆっくりと居間に行き、電気をつける

誰もいない広い部屋

そこに私は一人で、ポツンと立った

家にあるものは何でも、使っているから、と言っていた

私は、キッチンに向かった

冷蔵庫の中身を確認する

廉人さんは、料理をする人なのだろうか

それなりに食材はそろっていた

私はそれを使って、軽い夜食を作ってから、風呂に入り、居間のソファで横になった

「おいっ！」

廉人さんに頬を叩かれた目を開けると、スーツのままの廉人さんが立っていた

掛け時計を見て、時間を確認する

深夜2時だ

「何か？」

「何でベッドで寝てないんだよ」

「だって、ベッドは廉人さんのだから」

「風邪、ひくだろ？」

「平気ですよ」

「ベッドで寝ろ」

「はい」

私は起き上がった

廉人さんと手を繋いで、寝室に入る

廉人さんの大きなベッドに、横になった

一人暮らしなのに、ダブルのベッドだった

寝相、悪いのかな？

そんなことを思いながら、私は再び眠りについた

仮彼氏とキス

目が覚めると、私は手をつないでいた！

冷水を浴びたみたいに一気に夢から現実に取り戻される

夜中の出来事を思い出した私は、勢いよく起き上がった

寝ぼけていたとは、私は廉人さんと手を繋いで寝室に行った

廉人さんに支えてもらながら、布団にもぐった

それを脳内で、再生すると私の顔は真っ赤になった

は、恥ずかしい！

「寒い！」

「え…あ、ごめんなさい」

私は声に驚いて、布団にもぐった

え？ ええ？

体を回転させると、隣にいる人物の顔を見た

「うわっ」

私は驚いて後ろに下がった

そしてベッドから落ちた

ドンっと大きな音が部屋に響く

「大丈夫か！」

廉人さんが、驚いて起き上がった

風呂に入って寝た廉人さんの髪はさらさらで、綺麗だった

「痛いです」

私は起き上がると、床に座った

え？

「な、何で。裸なんですか？」

布団から出ている廉人さんは、何も来ていなかった

「寝るときは、何も着ないけど」

「え？ 着ないんですか？」

「ああ、面倒だし」

「面倒？」

面倒ってだけで、着ないで寝ちやえるものなの？

「パ、パ、パ：パンツも？」

「普段なら何も着ない。でも今日はあんたがいるから、ボクサーパンツだけ履いてる」

「ありがとうございます」

床に正座して、頭を下げる私

いや…、ちょっとお礼を言うタイミングが、違うような気がするけど

「早く入れ。寒い」

裸だからじゃないの？ …と思うけど、口出して言えない

「じゃ、失礼します」

私はベッドの中に入った

すっかり目が覚めてしまい、眠れない

隣に廉人さんが、裸で寝ているとわかってしまった以上、緊張して、眠れなくなってしまった

廉人さんに背を向けるけど、一度…いや、二度も見ってしまった体を、頭から追い出すのには、時間がかかりそうだった

仮彼氏とキス

「なあ、起きてるか」

「寝ました」

「キスするか？」

「もう爆睡中です」

廉人さんは、声を殺して笑っていた

「あんたって面白い。キスをしよう」

「グー、グー」

「寝た振りときたか。んじゃ、寝込みを襲うしかないな」

「ちょ…それは。反則です」

「一緒に寝てるのに、キスもないのは…おかしいだろ？」

「だからソファで寝てたんですけど」

「恋人同士なのに、どうして、別々になるのさ」

「期限付きですし」

「それでも恋人は恋人だろ？」

「そうですけど」

でも普通の恋人とは違います」

「知りあってその晩にセックスするような男女がいるのに、あんた
って考え方が真面目すぎる」

「一般人的思考です！」

「金持ち的思考なら、俺はこうする」

廉人さんは、私の上に乗るかかると、両肩を押さえて私にキスをした
抵抗しようと両腕を動かすけど、そう簡単に男性の力に勝てるはず
もなく：私は廉人さんの思うとおりにキスをされた

軽いキスから、深いキスまで

唇にするキスや首筋にするキス、鎖骨にも

廉人さんのキスに、私は力が抜けていった

「どう？ 金持ち的思考もなかなか、いいでしょ？」

「良くないです」

「頬が赤いけど？」

「外が明るくなってきたから、じゃないんですか？」

「外はまだ暗いよ」

廉人さんはまたキスをした

抵抗しない私に、面白がっていた

廉人さんはきつと、いろいろな女性にこうやって、口説いているの
だろうと思った

そしてこのベッドの上で、何十人もの女性を抱いてきたに違いない
そう思うと、なんか心の奥が苦しくなった

仮彼氏とキス

なんか寝た気がしない

私は教室の机で顔を伏せた

「あら……。彼氏ができなくて、困り切っている子がいるわ」

麗華さんの嫌味が聞こえてきた

それに反応している気力も、今はないよ

眠くて、体がだるい

「花音？ どうしたの？」

教室に入ってきた果恋ちゃんが声をかけてきてくれた

私は顔をあげると、果恋の顔を見て、癒しを求めた

「果恋ちゃん……」

口を開こうとする私に、果恋ちゃんが真っ赤な顔をした

「も……もしかして、お兄ちゃんとヤツた？」

「え？ 何を？」

私は果恋ちゃんの質問に首を傾げた

「何って、ナニ…でしょう？」

「え？ そんなことするわけないでしょう！」

「じゃあ。何で、そこに、キスマークがあるの？」

「ええ？」

私は果恋ちゃんが指をさす位置を、手のひらで隠してみた

ちようと鎖骨あたりだ

確かにそこはキスをされた

長いキスだなあって、思ってたけど痕がついているなんて…

私は席を立って、トイレに向かった

鏡の前に立つと、私はゆっくりと…手を外した

本当だ！ 痕が残っている

ちょっと痛いって思ってたけど、このせいだったんだ

「花音、お兄ちゃんとかした？」

「キスされた」

「そうなの？」

「うん。金持ち的思考だ!とか言って」

「馬鹿だ…猛獣だ。珍獣だあ…」

果恋ちゃんは頭を抱えた

「でも…」

果恋ちゃんはニヤリと笑う

「良い感じ? キスしたってことは、お兄ちゃんが花音に、その気になってきているってわけだし。良い傾向だと思うことにしよう!」

果恋ちゃんは前向き思考だ

見習わないと!

「これはやり過ぎだよね…」

トイレの鏡を二人で覗き込んだ

制服から見えるか、見えないかの位置に痕がある

先生に見つからないようにしないと、突っ込まれたら説明に苦しむよ

今夜は、廉人さんにちゃんと言おうつと

でもキスはもうしなかもしれないし、キスされたら…言えбайつか

仮彼氏とキス

廉人さんが車で正門に迎えにきた

私はそそくさと乗り込む

「おかえり」

廉人さんが珍しく優しく言ってきた

あれ？　今日は優しい

どうしてだろう

パーティーのときの模擬練習でもするのかな？

「ありがとうございます」

「まずはエステだな。その次は…」

ん？

廉人さんの言葉が途切れた

「どうしたんですか？　廉人さんのお店で女性の観察ですよ？」

「まあ、そうだけど」

なんか、不機嫌？

悪いことした？

気付かないうちに、何か仕出かしたのかな？

エステの駐車場についた

私は助手席を下りて、後部座席に置いた学生鞆を掴んだ

人の気配を感じると、そこには廉人さんが立っていた

え？

「な、何か？」

「別に」

廉人さんは、私の腰を掴んでキスをした

唇に軽く一回、それから舌を絡ませた

ちょ…ちよっと！

私は廉人さんの胸を叩いた

模擬練習にはしては、おかしいよ！

やり過ぎだよ

「迎えに来た男に、女はこれくらいのことをしないと。お礼にはならないから」

「はい…」

廉人さんは、そう言ってひとりで先にエステへと向かった

後から廉人さんを追いかけるようにエステ店に行くと、廉人さんはさっそく受付の女性と手を握り合って、話をしていた

さっきのキスの意味は、本当にお礼を教えてくれたのだけ？

みんな、キスをするものなのかな？

よくわからないよ

私は店の奥に入って、着替えるとエステティシャンのお姉さんにマッサージをしてもらった

お姉さんたちは、きっとキスマークに気付いているはず

でも見ないふりをして、会話にもあがらなかった

仮彼氏とキス

一通り終わると、お姉さんに化粧の仕方を教わった

眉の書き方から、口紅の塗り方まで

着替えも今日は、持ってきている

それに着替えると、鞆の中に制服を入れて、受付に戻る

廉人さんはソファに座って足を組んでいた

てっきり、受付の人と話をしていると思ったのに

「振られちゃった？」

私は廉人さんに声をかけた

「誰が？」

「廉人さんが、受付のお姉さんに」

「馬鹿を言うな。俺は振られない」

「そうだよな。さて、次はお勉強タイムだね」

「ああ」

どうして、不機嫌になるのだろう

私は、廉人さんが怖い顔をする理由がわからなかった

ホストのいるお店に来て2日目

まだ雰囲気には、慣れなくて、明るい照明に煌びやかな格好をしている男性陣

そこにいる自分が、どうしても不釣り合いに感じた

開店前に、私と廉人さんが店に入る

昨日すでに、見ているせいもありとくに好奇心な目で見られはしなかったけど、やっぱり緊張する

私は部屋の隅に座って、開店準備をする人たちを眺めた

舞台裏と表も見れて、良い機会に恵まれたな……なんて暢気に考えながら、楽しく女性と話すホストでも、楽しいだけの仕事じゃないのだと知った

廉人さんは、オーナーとしての仕事があるからと奥に入ってしまった

開店準備の合間を縫って、声をかけてくれるホストの皆さんと、楽しく会話をした

会話のリードが上手で、私は言葉につまることなく、話ができた

こんなふうに、男性とスムーズに話せるようになったのは、廉人さんそここのホストの皆さんのおかげだ

同年代の男子と話をしても、こんな風に会話ははずまないと思う

果恋ちゃん、ありがとう

本当に果恋ちゃんが、いなかったら私は今月も麗華さんに馬鹿にされて、終わってたよ

仮彼氏とキス

「花音、こっちに来て」

初めて、廉人さんに名前を呼ばれた

開店5分前になって奥から出てきた廉人さんが、声をかけてきた

「はい」

私は立ち上がると、話をしてくれてたホストの人たちにお礼を言った

廉人さんの後ろを歩き私は、店の奥へとはいっていく

え？

いいの？

こんな奥まで

でも奥に入ったら、勉強ができないよ

オーナー室に私は通された

10畳ほどの大きさに、机とパソコン…それと応接セットが置いてあった

私はソファに座った

言葉もないまま、廉人さんは机に座って、パソコンをいじり始める

「あの…?」

私は仕事中の廉人さんに声をかけた

「何?」

「えっと。勉強は?」

「今日はやらなくていい」

「でも…だって、日数が迫ってきてるし」

「今日はいいんだ」

廉人さんの携帯が鳴り、会話が終了した

お客さまからの電話らしく、営業トークをしていた

優しくて甘い声で、相手を褒めながら、会話をする

これも一つも勉強方法だ

そう私は思った

相手への配慮をして、会話を進めていく

褒めて嫌がる人はいない

会話の中に、相手が喜ぶ会話をいれることも大事なんだ

私は鞆からノートを出すと、メモをとった

「何してるんだ？」

「え？」

電話を終えた廉人さんが、ノートを覗き込んできた

私は慌ててノートを閉じると、笑顔を見せた

「メモです。良い女になるための。私なりに勉強して得たことを。書いているんです」

「ふうん」

返事をしながら、廉人さんは私の隣に座った

私と廉人さんは目が合った

熱い視線に、私は廉人さんから目をそらす

下を向いた私の顎を掴むと、廉人さんは私の顔を引き上げた

「良い女になれてます？」

私は声を裏返しながら、質問した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4033q/>

私の仮恋人は親友のお兄さん

2011年2月2日23時29分発行